

# 経済・金融 フラッシュ

## 最近の人民元と今後の展開 (2014年2月号)

経済研究部 上席研究員 三尾 幸吉郎

TEL:03-3512-1834 E-mail: mio@nli-research.co.jp

- 1月の米国ドルに対する人民元相場は基準値・現物実勢ともにほぼ横ばいで終えた。基準値・現物実勢ともに中旬までは堅調に推移していたものの、アルゼンチン（ペソ）が急落し、新興国市場の混乱をよそに米国連邦公開市場委員会が量的緩和縮小の継続を決めたことで、新興国通貨からの資金流出懸念が高まって、人民元高も一服することとなった。
- 2月の人民元（現物実勢）は、中国の景気悪化、長短金利の低下、新興国からの資金流出など人民元にとっては下押し要因が多いものの、米中首脳会談に向けて人民元改革に対する期待が高まると見られることから、横ばい圏で小確りの展開を予想している。

### [前月の動き]

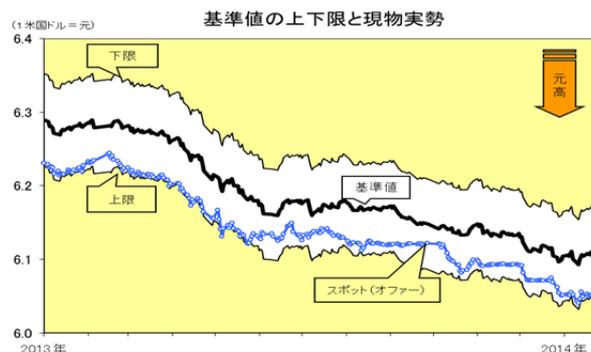
1月の米国ドルに対する人民元相場は基準値・現物実勢ともにほぼ横ばいとなった。基準値は当月安値が9日に付けた1米国ドル=6.1109元、当月高値が14日に付けた同6.0930元と小幅な値動きに留まり、1月末は12月末より0.1%元安・ドル高の同6.1050元で終えた。また、許容変動幅（基準値±1%）の範囲内で市場メカニズムによって動く現物実勢は、前月からの堅調地合いを引き継いで上昇して始まり、中旬には2005年7月の人民元切り上げ以降の最高値を2日連続で更新した。ところが、23日にアルゼンチン（ペソ）が急落し、29日には新興国市場の混乱をよそに米国連邦公開市場委員会（FOMC）が量的緩和縮小の継続を決めたことから、新興国通貨からの資金流出懸念が高まり、人民元高も一服した。春節（旧正月）の連休を控えた月末にはやや弱含みとなり、1月末は12月末より0.1%元安・ドル高となる同6.0619元（スポット・オファー、中国外国為替貿易センター）と、1月の安値で取引を終えることとなった（図表-1、2）。

(図表-1) 1月の値動き

	基準値			現物実勢		
	前日比 (注)	備考	備考	オファー	ビッド (注)	備考
12月末	6.0969	-	-	6.0544	6.0539	-
1月2日	6.0990	▲0.0021		6.0505	6.0501	
1月3日	6.1039	▲0.0049		6.0516	6.0514	
1月6日	6.1059	▲0.0020		6.0526	6.0522	
1月7日	6.1042	▲0.0017		6.0512	6.0511	
1月8日	6.1079	▲0.0037		6.0513	6.0512	
1月9日	6.1109	▲0.0030 (当月安値)		6.0555	6.0550	
1月10日	6.1008	▲0.0101		6.0521	6.0520	
1月13日	6.0950	▲0.0058	最高値	6.0434	6.0432	
1月14日	6.0930	▲0.0020 (当月高値)	最高値	6.0412	6.0409 (当月高値)	
1月15日	6.1005	▲0.0075		6.0461	6.0459	
1月16日	6.1065	▲0.0060		6.0563	6.0558	
1月17日	6.1041	▲0.0024		6.0494	6.0493	
1月20日	6.1083	▲0.0042		6.0533	6.0528	
1月21日	6.1066	▲0.0017		6.0509	6.0505	
1月22日	6.1087	▲0.0021		6.0513	6.0513	
1月23日	6.1107	▲0.0020		6.0518	6.0517	
1月24日	6.1035	▲0.0072		6.0489	6.0484	
1月27日	6.1022	▲0.0013		6.0480	6.0480	
1月28日	6.1053	▲0.0031		6.0508	6.0505	
1月29日	6.1073	▲0.0020		6.0558	6.0554	
1月30日	6.1050	▲0.0023		6.0619	6.0600 (当月安値)	

(資料) CEIC(中国外国為替貿易センター)

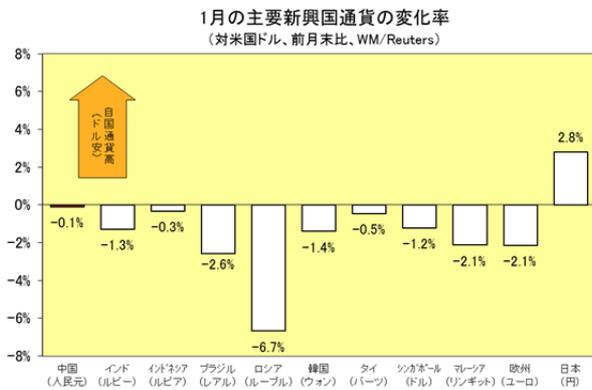
(図表-2)



(資料) CEIC(中国外国為替貿易センター)のデータを元にニッセイ基礎研究所で作成

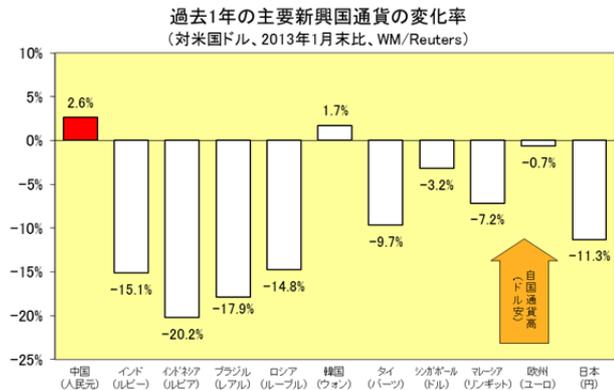
一方、1月の世界通貨の動きを見ると、米国で量的緩和縮小（テーパリング）が継続する中で、ロシア（ルーブル）が前月末比 6.7%下落、ブラジル（リアル）が同 2.6%下落するなど軟調な新興国通貨が多かった（図表-3）。また、過去1年で見ると、図表-4に示したように人民元は米国ドルに対して2.6%上昇と主要新興国通貨の中でトップの上昇率で、相対的割高感が高まっている。

(図表-3)



(資料) Datastreamのデータを元にニッセイ基礎研究所で作成

(図表-4)



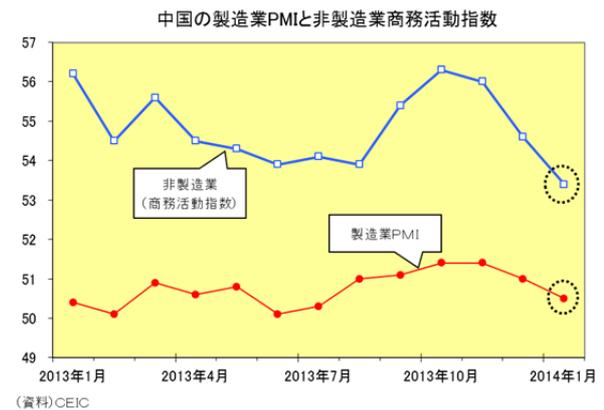
(資料) Datastreamのデータを元にニッセイ基礎研究所で作成

## [今後の展開]

さて、2月の展開だが、米国では、7日に債務上限引き上げ措置の期限切れを迎え、11日と13日には米国連邦準備理事会（FRB）議長のイエレン氏による議会証言など重要イベントが目白押しであるが、FOMCの予定はなく金融政策が変更される可能性は低い。

一方、中国では2月初めに製造業PMIと非製造業の商務活動指数が発表されたが、両者ともに悪化しており、中国の景気は当面のピークを越えて下向きとなっている（図表-5）。また、1月には春節連休を控えた資金需給逼迫や一部の理財商品で債務不履行の懸念が高まったことから短期金利が上昇したが、両者ともに前月中に当面の峠を越えたと見られ、景気も下向きになっていることから、2月の金利は長短ともに低下傾向になりそうだ。さらに、新興国からの資金流出傾向が続くようなことも人民元には逆風となることから、今月は人民元にとって下押し要因が多い。

(図表-5)



(資料) CEIC

但し、翌3月にオランダで開催される核安全保障サミットの機会を利用して米中首脳会談が行われると見られる。経済問題にどれだけ焦点が当たれるかは不明だが人民元改革に対する期待だけは高まりそうだ。従って、今月は人民元（現物実勢）にとっての下押し要因が多いものの、米中首脳会談に向けて人民元改革に対する期待が高まると見られることから、横ばい圏で小確りの展開を予想している。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。